

SHELLEYの‘WEST WIND’と ZEPHYRUS (ZEPHYR) との関係について

向山 淳子

ギリシヤ神話において Zephyrus (ゼピュロス) は西風の擬人化したものか或いは西風の神であるが、Shelley の “Ode to the West Wind” (「西風に寄せる歌」) に出てくる荒々しい ‘West Wind’ (西風) は、神話中の春の西風—Zephyrus (または Zephyr, その他数種の書き方がある) (ラテン語では Favonius ともいう) とは全く無関係のただ荒々しい秋の西風 (Ausonius) またはその擬人化したものだけであろうか。

Zephyrus は Cupid (キューピッド) と Psyche (プシケ) のロマンス (実は偶発的なロマンス) に加担し、Cupid の母である Venus (ヴィーナス) の怒りがあるにもかかわらず、Psyche を安全な地に運んだが、一方では猜疑心の強いプシケの姉二人にはサービスをしなかった。また、Zephyrus は Apollo (アポロ) が少年 Hyacinthus (ヒュアキントス) を可愛がっているのを妬んでこの少年に円盤投げの円盤が命中するように風を送った神でもある。弱いものには力を貸し与え、うぬぼれや疑いを持つものは容赦なく振り払っていった。他の三兄弟—北風 (ボレアース), 南風 (ソトス), 東風 (エウロス) のどれよりも親切で弱いものを助ける優しい風の神であった。

イギリスに於いても Zephyr は西寄りの快い風のイメージがある。ロンドンの中央気象庁からの情報では

Westerly winds occur at all times of year in the London area.

Indeed westerly and south-westerly are the most frequent

wind directions at all times of year. Strong winds can occur at all times of year, but generally uncommon during the summer, and much more common during the winter.

A zephyr is a westerly breeze with pleasant warm weather supposed to prevail at the summer solstice. Therefore the wild west winds which Shelley refers to cannot be zephyr because they are strong and they are occurring at the wrong time of year.

Zephyrus was the ancient Greek God of the west wind. As such he is often represented in association with strong westerly winds, however the English use of the word zephyr is, ... different from this.¹⁾

西よりの風は、ロンドン地域では年間いつでも、起きています。確かに西より並びに南西よりの風向きは年中頻繁にある風向きです。強い風は年中いつでも吹きますが、一般的に夏には少なく冬には多いものです。

西風ゼファーは、夏至の頃快い温暖な季節のときに吹く西寄りのそよ風です。ですからシェリーの意味する西風はゼファーではないのです。なぜならシェリーの西風はたいへん強くゼファーとは異なった時期に吹くからです。

ゼピュロスゼピュロスは古代ギリシヤの西風の神でありました。そのようなわけでゼピュロスゼピュロスは、強い西寄りの風に関係があるときにしばしば使われているのですが、ゼファーという語のイギリスイギリス（または英語）用法は、それとは異なるものです。

つまり気象庁の情報にはゼピュロスゼピュロスとゼファーとは異なった性質の風として区別すべきものであると述べている。ところが、Chaucer（チャウサー）の *The Canterbury Tales* の The Prologue（序）の中でゼピュロスゼピュロスは優しい春風として表されている。

When in April the sweet showers fall
And pierce the drought of March to the root, and all
The veins are bathed in liquor of such power
As brings about the engendering of the flower,
When also Zephyrus with his sweet breath
Exhales an air in every grove and heath
Upon the tender shoots,

.....

Then people long to go on pilgrimages ²⁾

四月、春雨が降り

三月の乾燥も、根本を潤すとき

木や葉の脈がすっかりそのような力の液に浸されと

花を開かせるようになる

甘い吐息の西風ゼピュロスも林や野原ならどこにでも

風を吹きかけ柔らかな新芽を出させると

.....

人々は巡礼に出掛けたいと思うのです

ここで Zephyrus は気象庁からの情報にある Zephyr と同じ意味を持つ。つまり現代のイギリス人が一般に持ち合わせている Zephyr のイメージと同じで 'sweet breath' をもたらす優しい風のことである。

アーサー王伝説の一つに *Sir Gawain and the Green Knight* (ガウェイン卿と緑の騎士) (1390頃中世英語詩-作者不明) の第二部、第二節、1~2行(累計行数・11.516-517) にもゼピュロスが優しい風として表されている。

Afterward the season of summer with the soft winds,
When Zephyrus blows gently himself on seeds and plants, ³⁾

その後夏の季節がそよ風とともに
ゼピュロス神は種や草木にやさしく吹きかける。

日本では、菅原道真の「東風（こち）吹かば匂いおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」の東風のような春風のことであるが、日本では東風や南東の風は年中しばしば吹いていて春だけに限らないし、「春一番」といった荒い風もある。ロンドンの気象庁のいうようにロンドンでは年中いつでも強い西風が吹くという。それをギリシヤの場合でいえば、ちょうど Zephyrus が Psyche の姉妹や Apollo にいじわるをしたときのように粗い風でもあるし、Psyche を運ぶだけの力強さと忍耐もそなえている心強い風でもある。四月は花爛漫の美しくてそよ風の吹く春ばかりではない。

T. S. Eliot は Waste Land (荒れ地) の中で四月は最も忌まわしい時節で、折角の冬の落ち着きを雨や風でかき乱してしまうから四月を愛でるわけにはいかないというのである。

April is the cruelest month, breeding

Lilacs out of the dead land, mixing

Memory and desire, stirring

Dull roots with spring rain

Winter kept us warm, covering

Earth in forgetful snow, feeding

A little life with dried tubers⁴⁾

四月は、残酷きわまる月だ

ライラックの花を、死んだようにじっとしている土から
揺り起こし

思い出と欲望を掻きまぜて

鈍感な根本を春の雨で揺すぶり起こす

冬は、我々を温かく護り

土を何もかも忘れさせる雪の下に包む

小さな命を乾いた
塊茎で養いながら

T. S. Eliot にとっては四月は好ましくないのかもしれないが、彼はワグナーのオペラ「トリスタンとイゾルデ」から次の一句を引用してヒヤシンス姫の悲恋“Waste Land”（I., ll. 31-34）にも望あれと歌う。

Frisch weht der Wind	爽やかに風は吹く
Der Heimat zu	故郷の方に
Mein Irish kind	我がアイルランドの子よ
Wo weilst du? ⁵⁾	いづこへ行くや

この風もやはり春の優しい風であり死を蘇らせる風である。春を好むか好まないかは、個々の人の春に対してもつ経験やイメージの相異によってきまるのであって、T. S. Eliot の“Waste Land”の場合、春といっても蘇らせる力が小さく遅々として蘇りが進まなかったので暗いイメージを持っているが、やはり基本的には春の風に心優しい蘇生力があるわけである。

Shelley が“Ode to the West Wind”（以後“Ode”と略す）を詠ったのは1819年10月20～25日だが、この“Ode”を書く数年前から次々に不幸なことが起こった。駆け落ちしてまで結婚した妻の Harriet は、1814年12月、Hide Park の Serpentine 湖に原因不明の投身自殺をした。Harriet との間に生まれた二人の子供-Iante（女兒1813年6月生）、Charles（男児1814年11月生）の親権も、結婚制度否定論を唱える不道德者としての Shelley より奪い取られてしまった。

かねてより敬愛していた William Godwin の先妻の娘 Mary と結婚（正式には1816年12月）した後、1818年3月にイタリアに移住し、この Mary との間に生まれた第二子の Clara（1817年9月生）が1818年9月に急死した。この以前1815年2月には一人を早産死させている。Shelley は Clara が亡くなった丁度この頃 *Prometheus Unbound* を書き始めたが、10月に第

1 幕を書き終えただけで、なかなか進まず、残りは翌年1819年3～4月になって第2～3幕を書き終えた。1819年5月悲劇 *The Cenci* を書き始めたが、6月7日に、Mary との間に生まれた最愛の第一子 William (1816年1月生) が亡くなったときの悲しみはよほど深いものであった。友人の Thomas L. Peacock に、William の死の翌日、早速悲しみを伝えている。

... it seems to me as if, hunted [haunted] by calamity as I have been, that I should never recover any [my] cheerfulness again. (June 8, 1819)⁶⁾

わたしは、ずっと禍いに絶えず付きまといられているかのように、再び心が晴れることは滅多にないように思えます。

最初の妻は自殺、その妻との子供二人の親権は剥奪され、二番目の妻との子供二人には急死されて大変悲しい家庭環境にあった Shelley は、その悲しみを軽減しようと *The Cenci* に7～8月中精神力を集中してこれを8月に完成した。

このように家族環境がどん底にあった Shelley に、社会的にも落胆の日々が押し寄せてきた。1819年9月になって、マンチェスターの近くの St. Peter's Field で泥酔した兵士達のグループが命令をとり違えたのか国会改革運動を支援する集会に参加していた男女子供に突入したため、少なくとも6人が殺され80人以上が負傷したという労働者弾圧-殺害事件(8月16日)のニュースを知った。9月21日付けで Peacock に送った手紙の中に Shelley の怒りがうかがえる。

What an infernal business this of Manchester! What is to be done?⁷⁾

マンチェスターのあれは何という非道な取引だ！ 何としてくれよう？

彼がオックスフォードの University College 時代、政治運動に熱中し、*The Necessity of Atheism*（「無神論の必要性」）を発表したため1810年10月放校処分されたが、今回は改革思想を露にするのではなく詩人として、“Spirit, Patience, Gentleness”（*The Mask of Anarchy*「無秩序の仮面」、ℓ. 258）と表しているように、忍耐を携え、詩を通して無知や権力に対応し、当時蒸気船などの近代科学に興味を抱いていた Shelley は、科学・詩・思想の総括的な力を求めて、“Science, Poetry and Thought / Are thy lamps;”（*The Mask of Anarchy*, ℓ. 254）と記し、無秩序や無知を戒めている。彼の断片詩に“Zephyrus the Awakener”があり、1821年に書かれたと分類されているが、実際にはこれは1819年の Notebook に書き込まれていたものである。

Come, thou awakener of the spirit's ocean,
Zephyr, whom to thy cloud or cave
No thought can trace! speed with thy gentle motion!⁸⁾
来れ、汝、魂の海を目覚めさせる者よ
ゼファーよ、汝の作る雲と雲でできた洞窟に
教わる思想が見当たらない! 優しい動きでよいから早く来れ

この断片の題は、編集者がつけたものと思われるが、二行目の Zephyr は Shelley 自身の手書きから来たものである。上の断片詩の内容からみてもゼファーは魂の大海を目覚めさせるような masculine の風であると同時に gentle motion の feminine の風でもある。Shelley は Zephyrus と Zephyr は同じ意味として扱っていたと判断することができるので、ロンドンの気象庁からの情報のように Zephyrus はギリシャ神話の西風の神、Zephyr はイギリスの西寄りのそよ風というように区別する必要はない。

Neville Rogers は Shelley の24冊の notebook を丹念に調査研究のすえ、上記の断片に未出版の断片を加え、苦しみのどん底にいる Shelley の心境がよく表れていると述べている。

O sudden & inconstant light which shinest
On us who wander through the night of life
Whereby we see the past... O power divinest,
O Knowledge
Come thou awakener of the spirit's Ocean
Zephyr, whom to thy cave or hollow cloud
No thought can trace... feed with thy gentle motion⁹⁾
人生の暗闇をさまよう我らを照らし出す
突然で、変化のある光よ、
そこでは、過去が見える、... 神聖な詩作の力よ
おお、知識よ。(以下省略、ただし、Rogers 編では、speed が
feed になっている点は興味がある。)

Shelley はこのころ *Mask of Anarchy* にとりあえず神経を集中し、マン
チェスター事件を初めとする社会悪に対抗した。そしてその後で、断片中
の 'Zephyr' を主題にして "Ode to the West Wind" を作りあげた¹⁰⁾ これは
詩作の力にも知識にも頼れない時に Shelley の切なる祈りの言葉を引き出
してくれるのである。

1819年10月になって Shelley は、妊娠中の妻 Mary にスコットランド人
の外科医の医療を受けさせたくて Florence に移った。外国にいて医療を
受ける時の不安な気持ちを9月27日付けの Leigh Hunt への手紙の中で
漏らしている。

We are now on the point of leaving this place (Livorno) for
Florence, where we have taken pleasant apartments for six
months, which brings us to the 1st of April, the season at
which new flowers and new thoughts spring forth upon the
earth and in the mind.

..... I should feel some disquietude in entrusting her to the best of the Italian practitioners. ¹¹⁾

我々は、まさにここを離れてフロレンスに向かおうとしています。そこで6か月間アパートを借りて、4月1日がくるまで過ごします、4月という季節は土には新しい花が、頭には新しい考えが生まれ出てくるのです。

..... イタリアの開業医の最も腕のきく医者でも彼女を託すにはいささか不安を感じるのです。

人は外国にいて病気になったときいわゆるホームシックになるものである。Shelleyも故郷を思う気持ちは募っていったのである。少なくとも zephyr の吹く春が来るのを待とうと6か月だけアパートを借りることにしたのである。

折角のフローレンスなのに、ここでたまたま *Laon and Cythna* (1817) (改題後の *The Revolt of Islam*, 1818年1月) に対する痛烈な批判、しかも彼の人格を無視したような 'The Droll remarks' (ふざけた批評) を載せた *Quarterly Review* (1819年4月号) に出会い、大変くやしい思いをし、Ollier 宛に 'what an infernal business' (なんという悪魔のような仕打ち) と書いている。¹²⁾ その *Quarterly Review* の記事は次の通りである。

In the enthusiasm of youth, indeed, a man like Mr. Shelley may cheat himself with the imagined loftiness and independence of his theory, and it is easy to invent a thousand sophisms to reconcile his conscience to the impurity of his practice : but this lasts only long enough to lead him on beyond the power of return ; he ceases to be the dupe, but with desperate malignity he becomes the deceiver of others.¹³⁾

実際、若気の至りで、シェリー氏のような人は、自分の理論を高尚且つ特有のものであると、建前上、自分を納得させている

のかもしれない。そういうわけで彼の良識と実際の言動の不誠実さにつじつまを合わせるために次から次へといとも容易に詭弁を凝らすのである。しかし、これも長続きはせず反論の力が失せてしまう・負け犬状態から抜け出そうとするが、死に物狂いの怨恨のせいで他の人達を裏切ってしまう。

Shelley が、10月15日の Olliers 宛と、11月2日の Leigh Hunt宛に送った手紙の中で、記事の主は Southey ではないかと確信しているが、この記事が Shelley の Eton 時代の先輩のものであったことは、その時点で知るよしもなかった¹⁴⁾

11月に嫡男 Percy (1819年11月12日生) が生まれたことは、Shelley にとってこの上ない喜びとなった。11月13日付けの Leigh Hunt への手紙にその喜びが表れている。

Yesterday morning Mary brought me a little boy. She suffered only about two hours's pain, and is now so well that it seems a wonder that she stays in bed. The babe is also quite so well, and has begun to suck. You may imagine that this is a great relief and a great comfort to me amongst all my misfortunes past present and to come. ¹⁵⁾

昨日朝、メアリーが可愛い男の子を産みました。彼女は2時間位しか苦しみませんでした。そして今は大層元気になっているのでベッドにいるのが不思議な位です。ベビーもまた全く元気で、乳を吸い始めています。私にとって、過去・現在はたまた未来も入れて、あらゆる不幸の中で、これほど安心させてくれ、慰めてくれるものはありません。

子供を次々に急病で失った Shelley が、ここで使った一語 relief の意味は、母子共に死ななかったことに対するほっとした気持を表すものであり、ど

んな苦勞も子供に死なれるよりは耐えられるものであるという意味で、このペービーの誕生は何にもまさる慰安なのである。生も死も人間のコントロールできるものではなく、自然の果てしない創造力・生命力・活動力など、生から死への永遠の循環に任せるだけなのである。自然は狂暴な破壊力であり、また再生する力でもある。死は生の変形であり、破壊があつてこそ創造が生まれるのである。

Shelleyはこの自然の力を用いて象徴的に表したのである。彼の叙情的表現力は、使っている語(句)に洗練された、不純物のない軽さを感じさせ、想像の世界へと浮き上がらせてくれる。wind(風)・waters(水)・shadows(陰、影)・cloud(雲)・dead leaves(枯れ葉)・ghostly forms(靈魂)などはどれも固定的なものではない。これは彼のゴシック文学からの影響もあるが、彼の叙情的力が作り出したものである。

常に社会的・道徳的問題にも悩まされていた彼が、詩の地位について1819年1月24日付けのPeacock宛の手紙の中で述べている。

I consider Poetry very subordinate to moral and political science, and if I were well, certainly I should aspire to the latter; for I can conceive a great work, embodying the discoveries of all ages, and harmonising the contending creeds by which mankind have been ruled.¹⁶⁾

詩というものは実に道徳学、政治学に従属するものであると思います。もし差し支えなければ、私は確かに後者を熱望します。なぜかと申しますと、あらゆる時代の新しい考えを具体的に表現し、且つ又人間を治めてきた強い伝来の主義と協調すれば、一つの良い作品を生み出すことができるからです。

ところが、彼の“A Defence of Poetry”(詩の擁護)(1821年2月～3月執筆)では、poetryが、人間のなし得る業績の中で最も高い地位をしめている旨を述べている。

Poetry is indeed something divine. It is at once the centre and circumference of knowledge ; it is that which comprehends all science, and that to which all science must be referred. It is at the same time the root and blossom of all other systems of thought : it is that from which all spring, . . .
17)

詩は確かに何か神聖なものである。それは知識の中心であり、且つ円周でもある。それはあらゆる科学を含むものであり、しかもあらゆる科学が頼りにするものである。他のあらゆる思想システムの根であり花である。すべてがそれより生まれるのである。

ここで Shelley の poetry についての価値判断が一見矛盾しているように見えるが、彼の "A Defence of Poetry" は詩論を修辞上の問題に関して論じたものではなく、一種の賛美という範囲内でプラトンやワーズワース・コールリッジから引き出されたものである。Shelley を批評する時には彼の散文だけで判断しては不十分である。詩人には、理性と感情が時と場所によっていろいろ入り混じったり、出たり入ったりして留まることがないときでも最も満たされた、最も真実を知る瞬間があるという。その瞬間はちょうど海の上を吹く風 'a wind over a sea' ("A Defence of Poetry") のように、吹いては消え、消えては吹く何か神聖なもので詩人にはこれを掴む力がある。

Poetry is the record of the best and happiest moments of the happiest and best minds. We are aware of evanescent visitations of thought and feeling sometimes associated with place or person, sometimes regarding our own mind alone, and always arising unforeseen and departing unbidden, but elevating

and delightful beyond all expression : . . . It is as it were the interpenetration of a diviner nature through our own ; but its footsteps are like those of a wind over a sea, which the coming calm erases, and whose traces remain only as on the wrinkled sand which paves it.¹⁸⁾

詩は、最も幸せな最も真実な精神状態の最も真実で最も幸せな瞬間の記録である。我々は、時には場所とか自分以外の人に関して、ときには自分自身の心に関して、理性と感情が出たり入ったりするのに気付く、しかもそれは、いつも予期せずに見え、ひとりでに去っていくが、言葉に言い尽くせないほど感激極まらせたり、歓喜溢れるものである。――それは、あたかも我々の人間性に、より一層神聖な性質が浸透してくるかのようであるが、その神聖なものの足取りは海原を吹く風の足取りに似ていて、次に来る風がこの足取りを断ち、その後にはその神聖なるものをはめ込んでしまう砂の上にのみ縞模様となって残るのである。

上の引用文にある windこそ、詩の価値付けの際に起こる Shelley の矛盾をもたらす考えを説き明かすものであり、理想と現実をつないでくれるものである。この windこそ“Ode to the West Wind” (1819年10月) の windなのであった。

O wild West wind, thou breath of Autumn's being,
Thou, from whose unseen presence leaves dead
Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing.¹⁹⁾

おお、はげしい西風 汝、秋ならでは感じられぬ息吹きよ
汝よ、目に見えない汝の姿の真前から枯れ葉が、まるで
妖術者から逃げ回る亡霊のように追い立てられる。

Shelleyはフローレンス郊外のアルノ川を裾に持つ森の中を一人で歩いている時にこの詩の題材を得た。森の樹木の葉が色褪せて、枯れ葉が飛び散っているのを見て、人が年老いて白髪になり、その髪も薄くなっていくのを思い浮かべた。

'Twas the 20th of October
And the woods had I grown sober
As a man does when his hair
Looks as theirs did grey & spare
When the dead leaves
As to mock the stupid
Like ghosts in---

Shelley, Notebook の断片より²⁰⁾

10月20日のことだった。

森の木々はすっかり色褪めて
まるで人の髪が、それら木の葉と同じように
白くて少なく見えるように
枯れ葉が、亡霊のように
無感覚な愚か者をあざけるかのように---

第三節までは wind が陸・空・海に対して、破壊者として保護者として働きかけるのを表し、その風の威力を讃えている。第四節では、Shelley 自身が、人間の死を受け入れ、陸の木の葉か空の雲あるいは海の波になって風の威力を受けたいと祈るのである。

..... I would ne'er have striven
As thus with thee in prayer in my sore need.
Oh! lift me as a wave, a leaf, a cloud!
I fall upon the thorns of life! I bleed!²¹⁾

私はいままでこんなにまで祈りに力を入れたことはない
今は悲嘆に暮れて汝にこれほど祈るのです
おお、波のように木の葉のように雲のように私を持ち上げてく
ださい。
私は人生の茨のうえに倒れ、血を流す

第五節では、枯れ葉が散って次の新芽が出るように輪廻転生をこいねがっ
ている。出来れば風そのものになりたいと願っている。

..... Be thou me, impetuous one!

Drive my dead thoughts over the universe
Like withered leaves to quicken a new birth!
And, by the incantation of this verse,

Scatter, as from an unextinguished hearth
Ashes and sparks, my words among mankind!
Be through my lips to unawakened Earth

The trumpet of a prophecy! O Wind,
If Winter comes, can Spring be far behind?²²⁾

私になってください猛烈な方よ

私の死んでしまった思想を 天空に舞上げてください
それはちょうど枯れ葉が新しい命の誕生を早めるように
そして、この歌のまじないによって

まだ消えてない炉端からの灰や火花のように
私の言葉を人類の間に撒き散らしてください

私の口を通してまだめざめぬ陸地に

予言のラッパを吹きならせ おお、風よ

冬来りなば 春遠からずや

11月12日に息子が誕生したことは Shelley にとっては春のおとづれであった。同年12月には *Prometheus Unbound* 第四幕の完成に至ったのも彼にとって大きな喜びであった。

Charles Ollier 宛の1819年12月15日（あるいは25日）付けの手紙の中で 'the best thing I ever wrote'²³⁾ と自信作である旨を知らせている。“Ode to the West Wind” が初めて世に出たのは、*Prometheus Unbound* 版の中に入れられて、1820のことであった。*Prometheus Unbound* が彼の自信作である理由の一つとして Thomas Medwin に出した手紙（1820年7月20日付け）の中の一節が上げられる。

Prometheus Unbound is in the merest spirit of ideal Poetry, and not, as the name would indicate, a mere imitation of the Greek drama, or indeed if I have been successful, is it an imitation of anything.²⁴⁾

「自由の身となったプロメテウス」は理想の詩をつくるという純粹の心持ちで書いたものであり、その詩の題名が示すように、ギリシヤ劇の模倣でもなければ、勿論、それで成功を取めても、それは何の模倣でもない。

どんな偉大な詩人でも「いざ、詩をつくらん」(I will compose poetry.)²⁵⁾などと、持ち合わせの理性だけで詩は書けない。

... the mind in creation is as a fading coal which some invisible influence, like as inconstant wind, awakens to transi-

tory brightness: this power arises from within, ...²⁶⁾

...創造の精神とは、消えかかった石炭の火が、変化の多い風のような、目に見えない力によってつかの間だけ燃え上がる：この力は内から沸き上がるものである。

引用中の *inconstant wind* は *'ever-changing wind'*²⁷⁾ ともいえる。その風が詩人を表すイオリアン琴に吹くと *'ever-changing melody'* を奏でてくれるのである。

Man is an instrument over which a series of external and internal impressions are driven, like the alternations of an ever-changing wind over an Æolian lyre, which move it by their motion to ever-changing melody.²⁸⁾

人間は、外と内からの印象の繰り返しが奏でられる楽器であり、それはイオリアン琴に吹く気まぐれな風の変化が、その変化の力で変化に富んだメロディーを奏でてくれる。

そこで詩人は外と内の美しいハーモニー (harmony) を見つけたのである。

枯れ葉の直喩 (simile) の伝統では、Homer・Virgil・Dante・Miltonにおいて死者の魂が風に落とされた落ち葉にたとえられている。秋の西風の伝統的な呼び名はオーソニアス (Ausonius) と呼ばれ、イタリアの国の詩的呼称はオーソニア (Ausonia) とよばれるのであるが、ギリシア神話の春の西風 (Zephyrus), ローマ神話のファヴォニウス (Favonius) は男性的な春の西風である。Shelleyはこの春の男性的な西風を、春の女性的でしかも復活を促す西風に応用している。西風が枯れ葉や羽毛のついた種を吹き飛ばすのは、春になって西風の妹--璠 (ルリ) 色の風が、これらの種の眠る大地をめざます風である。

彼の祈りは彼一人のために止まらず、*'Drive my dead thoughts over*

the universe' と自分を取り巻く世界の人々にも新しい喜びが与えられるように祈ったのである。

“Ode to the West Wind” の第一節の中に Yellow, and black, and pale, and hectic red, / Pestilence-stricken multitudes (黄, 黒, 青, 病的に紅潮した赤色の, 疫病におかされた数々の葉) (モンゴリア・ニグロ・白人・アメリカンディアン) とあるのは, 世界のいろいろな人種を表しているという説もある²⁹⁾ withered leaves は痩せた土地を肥やし, そこに winged seeds は芽を出す。短命であると予知していた Shelley は, 自分の body (体) は ashes (灰) になるが, spirit (精神) は sparks (火花) となって西風に吹かれる the seeds のように生まれ変わって人間の幸せをもたらすよう切に祈ったのである。

ゴシック・ストーリーの強い影響が薄らいでくるにつれて, Shelley はスペンサー・ミルトン・エリザベス朝戯曲・ギリシヤ古典に傾いていった。「詩の擁護」を書くにあたっては, ギリシヤ古典・ヘロドトス・ホーマー・プラトンの影響が大きい。彼は古典を参考しているが, やはりれっきとしたイギリスのローマン主義の詩人であった。思想的には個々の人間を信じ, 美德と進歩への無限の能力を信じ, 悪は社会の制度や専制政治の結果として生まれるものであると信じていた。精神的な面では, 彼が *Prometheus Unbound* や “Ode to the West Wind” の中で示してきたような個々の経験を大切にした。彼の宗教心は彼自身の経験の中にあり, 輪廻転生は彼自身の感覚力を信頼することから生まれると信じていた。Shelley の西風は, 基本的には Zephyrus (Zephyr) であり, 風の烈しさ・弱さの問題ではなく, 心優しい風のもたらす輪廻転生を彼の感覚力で感じとったのである。

注

- 1) The Meteorological Office, London から筆者宛の手紙(1993年7月27日付け)
- 2) Chaucer, G. *The Canterbury Tales*. London: Viking Penguin Inc., 1977, p. 19, ll. 1-7, l. 12.

- 3) Garbaty, Thomas J., ed. *Medieval English Literature*. Lexington, Mass. : D. C. Heath and Company, 1984., p. 271. "Sir Gawain and the Green Knight" 第2部, 第2節, ll. 1-2.
- 4) Abrams, M. H., ed. *The Norton Anthology of English Literature*, 3rd ed., Vol. 2, p. 2172. T. S. Eliot. "The Waste Land," I. ll. 1-7.
- 5) *Ibid.*, p. 2173. ll. 31-34. "Fresh blows the wind to the homeland, my Irish child, where are you waiting"
- 6) Ingpen, Roger & Peck, Walter E., ed. *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. New York : Gordian Press, 1965, Vol. X, p. 53. "To Thomas Love Peacock," from Rome, June 8, 1819.
- 7) *Ibid.*, p. 83. "To Peacock," from Leghorn, Sept., 21, 1819.
- 8) Hutchinson, T., ed., *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. Humphrey Milford : Oxford Univ. Press, 1923. p. 653. "Zephyrus the Awakener"
- 9) Rogers, Nevile. "Shelley and the West Wind" in *Shelley. Modern Judgement*, ed. by R. B. Woodings. London : MacMillan and Company. 1969, p. 62.
- 10) *Ibid.*,
- 11) Ingpen & Peck, ed. *op. cit.* Vol. X, pp. 86-7.
- 12) *Ibid.*, p. 83. 'What an infernal business'
- 13) *Ibid.*, Footnote より.
- 14) *Ibid.*, p. 95. "To Charles & James Collier" Oct., 15, 1819. "The Droll Remark"は Southy のものであると Shelley は推測している。
Ibid., p. 103. "To Leigh Hunt" Nov. 2, 1819. この手紙においても Southy の件を述べている。
- 15) *Ibid.*, p. 122. "To Leigh Hunt" Nov. 13, 1819.
- 16) *Ibid.*, p. 21. "To Peacock" Jan. 24, 1819.
- 17) Reiman, Donald H. & Powers, ed. *Shelley's Poetry and Prose*. "A Defence of Poetry," p. 503.
- 18) *Ibid.*, p. 504.
- 19) *Ibid.*, "Ode" ll. 1-3. p. 221.
- 20) Woodings, ed. *op. cit.*, p. 66.
- 21) Reiman & Power. ed. *Shelley's Poetry and Prose*.. "Ode" ll. 51-54., p. 223.
- 22) *Ibid.*, "Ode" ll. 61-70.,
- 23) Ingpen & Peck, ed. *op. cit.*, p. 135.
- 24) *Ibid.*, p. 192.
- 25) Reiman & Power, ed. *op. cit.*, "A Defence of Poetry" p. 503.
- 26) *Ibid.*, pp. 503-4.
- 27) *Ibid.*, p. 480.

28) *Ibid.*

29) *Ibid.*, p. 221. footnote より.